



PLAY^{演劇} 2011/2012シーズン



新国立劇場

NEW
NATIONAL
THEATRE
TOKYO

2011年1月

| Contents |

演劇芸術監督 宮田慶子	2
2011/2012シーズン 演劇 ラインアップ	3
【美×劇】—滅びゆくものに託した美意識— I 朱雀家の滅亡	4
【美×劇】—滅びゆくものに託した美意識— II イロアセル 新 作	7
【美×劇】—滅びゆくものに託した美意識— III 天守物語	10
パーマ屋スマレ 新 作	13
まほろば 再 演	16
海外作品 (作品未定) 日本初演	19
[JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—] V サロメ 新訳上演	20
[JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—] VI 温室	23
公演一覧 (1997.10 ~ 2011.7)	26



演劇芸術監督
Artistic Director (Play)

宮田慶子
Miyata Keiko

「美×劇」—「JAPAN MEETS…」を受けて

2011/2012シーズンの幕あけは、「【美×劇】—滅びゆくものに託した美意識—」と題したシーズンテーマのもと、大正・昭和、そして平成の現代と、ほぼ一世紀の時をまたぐ日本戯曲三作品を企画いたしました。

前シーズンの「JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—」において、近代以降に日本の演劇界が出会い、大きな影響を受けた世界の戯曲を取り上げました。それら優れた海外作品の洗礼を受けた日本の演劇は、新しい時代の作劇術に取り組みつつ、同時に、歴史や風土に根付いた“日本的なるもの”を模索し、日本独自の美意識を軸に、西洋と日本の融合を図る作品を生み出してきました。

1917年発表の泉鏡花作『天守物語』、そして1967年発表の三島由紀夫作『朱雀家の滅亡』の二作品は、半世紀の時をはさんで、ともに研ぎ澄まされた美しい台詞にいろどられた、「日本的なる美」の世界観を展開した作品です。

そして更に半世紀を経た今、新たな試みとして、同テーマのもと、気鋭の劇作家、倉持裕氏に、新作『イロアセル』を書き下ろして頂きました。

戯曲における美しい言葉だけでなく、「美」という概念そのものを語ることすら少なくなっている現代、もしかするとそのことは創造本能の根幹にかかわる問題であり、思いのほか根深い病巣になってしまっているようにさえ思います。「美×劇」のシーズンテーマを立て、「美」と「演劇」との出会い、そして可能性を探る契機としたと思います。

続いては、前シーズンの『焼肉ドラゴン』の再演を受けて鄭義信氏の新作書き下ろし『パーマ屋スマイル』。『焼肉ドラゴン』前史ともいえる作品です。

そして、岸田國士戯曲賞受賞、蓬萊竜太氏作『まほろば』の再演と、新国立劇場の“財産”ともいうべき作品が続きます。

更に5月には、待望の、海外現代戯曲の日本初演を企画しています。

6～7月のシーズンの締めくくりは、「JAPAN MEETS… V／VI」として、オスカー・ワイルド『サロメ』、ハロルド・ピンター『温室』。

『サロメ』は、平野啓一郎氏による新翻訳に、宮本亜門氏が演出にあたり、レーゼドラマの境界を越えた、新たな舞台を立ち上げます。

『温室』は、20世紀演劇を代表するノーベル文学賞作家、ハロルド・ピンターの、後期の転換点ともなった注目度の高い作品です。

また、各公演と関連する内容で好評を頂いておりますマンスリー・プロジェクトも、演劇講座、リーディング、トークセッション、ワークショップなど、更に魅力的で充実した内容のプログラムを準備しています。

「JAPAN MEETS…」の視点を引き継ぎつつ、それを受けた日本の演劇の中に展開する独自の「日本的なるもの」を検証し、繊細かつ華麗で強靱な、「美×劇」の出会いをお楽しみ頂きたいと願っています。

〈プロフィール〉

1957年生まれ、東京都出身。新国立劇場演劇芸術監督。

80年、劇団青年座（文芸部）に入団。83年青年座スタジオ公演『ひといきといき』の作・演出でデビュー。

翻訳劇、近代古典、ストレートプレイ、ミュージカル、商業演劇、小劇場と多方面にわたる作品を手がける一方、演劇教育や日本各地での演劇振興・交流に積極的に取り組んでいる。

新国立劇場演劇研修所講師・サポート委員。社団法人日本劇団協議会常務理事、日本演出者協会副理事長。

主な受賞歴に、94年第29回紀伊国屋演劇賞個人賞（『MOTHER』青年座）、97年第5回読売演劇大賞優秀演出家賞（『フユヒコ』青年座）、98年芸術選奨文部大臣新人賞（新国立劇場公演『ディア・ライアー』）、2001年第43回毎日芸術賞千田是也賞、第9回読売演劇大賞最優秀演出家賞（『赤シャツ』『悔しい女』青年座、『サラ』松竹）など。

上記以外の主な演出作品に、『ブンナよ、木からおりてこい』『妻と社長と九ちゃん』『千里眼の女』（青年座）、『愛は謎の変奏曲』『恋の三重奏』『ガブリエル・シャネル』（松竹）、『ノイズズオフ』『エレファントマン』『ベテン師と詐欺師』（ホリプロ）、『ふたたびの恋』『LOVE30』（バルコ）、『伝説の女優』（アトリエ・ダンカン）など。

新国立劇場では上記『ディア・ライアー』のほか、『かくて新年は』『美女で野獣』『屋上庭園』を演出している。

2010/2011シーズンは『ヘッダ・ガーブレル』『わが町』『おどくみ』を演出。

2011/2012 シーズン 演劇ラインアップ

〈計 8 演目〉

2011.9-10

【美×劇】—滅びゆくものに託した美意識— I

朱雀家の滅亡

作： 三島由紀夫

演出：宮田慶子

2011.10-11

【美×劇】—滅びゆくものに託した美意識— II

イロアセル

作： 倉持 裕

演出：鶴山 仁

2011.11

【美×劇】—滅びゆくものに託した美意識— III

天守物語

作： 泉 鏡花

演出：白井 晃

2012.3

パーマ屋スマレ

作・演出：鄭 義信

2012.4

まほろば

作： 蓬萊竜太

演出：栗山民也

2012.4-5

海外作品 (作品未定)

演出：宮田慶子

2012.6

[JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—] V

サロメ

作： オスカー・ワイルド

翻訳：平野啓一郎

演出：宮本亜門

2012.6-7

[JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—] VI

温室

作： ハロルド・ピンター

演出：深津篤史

朱雀家の滅亡

小劇場

●前売開始：2011年7月16日（土）

作：三島由紀夫

演出：宮田慶子

出演：國村 隼／香寿たつき／柴本 幸／木村 了／近藤芳正

企画意図

演劇芸術監督就任2年目にあたる2011/2012シーズンは、シリーズ「【美×劇】—滅びゆくものに託した美意識—」をテーマに、日本の近代古典と新作を織り交ぜ企画した。

オープニングを飾るのは、『朱雀家の滅亡』。エウリピデスの『ヘラクレス』をベースに、太平洋戦争末期のある華族の滅亡を描く三島由紀夫晩年の名作である。盲目的なまでに「国家」や「天皇」へ忠誠心を捧げることが信条とする男と、対照的に、現実を生き、愛し、生身をさらけ出す女が織りなす壮大な滅びの物語が、三島の流麗な文体にのせて描かれる。

『朱雀家の滅亡』は1967年に劇団NLT公演として、松浦竹夫演出、中村伸郎、南美江らにより初演。三島由紀夫の死後、1971年に劇団浪漫劇場公演として、同キャストにより上演された。その後しばらく上演はなく、1987年にセゾン劇場にて、出口典雄演出、杉浦直樹、加藤治子らによって上演された。近年では、2007年に宮田慶子演出により中山仁、佐久間良子らの出演で上演されている。

作 品

時は、太平洋戦争末期。

名門侯爵家の当主、朱雀経隆は、専横な振る舞いを続ける首相を天皇のために失脚させたのち、自らも辞職して帰還する。

女中おれいや婚約者璃津子の反対を押し切って、出征を願いでた息子の経広は、叔父宍戸光康とおれいの反対にもかかわらず、戦地へ赴き戦死してしまう。

おれいは、経広を無為に失わせた経隆を責め、死を嘆き悲しむが……

忠誠心とは、国家や、大義とはいったい何なのか、ある華族の崩壊を通して問いかける。

演出家からのメッセージ

宮田慶子

『朱雀家の滅亡』は、三島由紀夫が自ら最期の刻を迎える三年前の1967年に発表されました。

『近代能楽集』『鹿鳴館』『薔薇と海賊』『熱帯樹』『サド侯爵夫人』など、美しい台詞、格調高い文体にいろどられた数々の名作を発表したのち、三島の視点は、社会、国家、個人の関係性について、より先鋭化していきます。

戦禍を越えたのちに歩む、表層的熱狂にも見える高度成長期の中で、皮肉なまでに確実に失われていくもの、滅んでいくものに対する悲壮な想いが、全体を貫いている作品です。

戯曲の中において「美」と「現実」を結びつける行為は、まさしく一つの戦いです。それは人間の「観念と情緒」「精神と肉体」の融合点を求めようとする、果てしない戦いでもあります。そして、その戦いこそが、日々私達が、稽古場で、丹年に作業を積み重ねている、真の姿でもあります。

三島戯曲を丁寧にひもときながら、『朱雀家の滅亡』の台詞に托された「美」、世界観に托された「美」を、しっかりと有効性のあるものとして創り上げたいと思っています。

朱雀家の滅亡

三島由紀夫

Mishima Yukio

1925 年 東京市四谷区生まれ。学習院初等科から中等科および高等科を経て東京帝国大学法学部卒。卒業後、大蔵省銀行局国民貯蓄課に勤めたが 9 か月で退職、作家として独立した。華麗な文体と、特異な心理分析、古典美によって裏打ちされた作風で多くの作品を発表。代表作に、戯曲『近代能楽集』『サド侯爵夫人』『わが友ヒットラー』、小説『仮面の告白』『金閣寺』『潮騒』『豊饒の海』四部作などがあり、ノーベル文学賞候補に何度も挙げられたことがある。後年、芸術至上的な独特な思想に傾く一方、次第にナショナリズム的色彩を強めていった。70 年 11 月 25 日市ヶ谷にある陸上自衛隊駐屯地にて割腹自殺。享年 45 歳。毎年 11 月 25 日には「憂国忌」が営まれる。なお、98 年 7 月に完成した山中湖「山中湖文学の森」に、三島由紀夫文学館が建設され、『豊饒の海』創作ノートや自筆原稿のほか、多数の貴重な資料が収蔵、展示されている。



宮田慶子

Miyata Keiko

※ P2 を参照

イロアセル

小劇場

●前売開始：2011年8月6日（土）

作：倉持裕

演出：鶴山仁

企画意図

シリーズ「【美×劇】—滅びゆくものに託した美意識—」の二作目は書き下ろし作品。「滅び」をテーマに、日本の近代劇から始まるラインアップの中で劇作家、倉持裕と演出家、鶴山仁が初めて、タッグを組む意欲作だ。

劇団ペンギンプルペイルパイルズを主宰し、劇団作品の脚本・演出のみならず、外部の多様なプロデュース公演でも脚本家・演出家として活躍する倉持裕が新国立劇場に劇作家として初登場。

昨年夏まで芸術監督を務めた演出家、鶴山仁とのコラボレーションは見逃せない。ふたりの出逢いは2009年、演出家と芸術監督として『昔の女』の上演にいたったが、脚本家と演出家として作品と一緒に創り上げるのは初めてである。

作品

とある小さな町。

その町の住民の声や文字には色があり、全員それぞれ異なる色を持っている。そのせいで、いかなる手段で発言しようと、固有の色によって個人が特定できてしまう。そのため、彼らは常に慎重に発言し、ウソをつかない。ある日その町の広場に檻が建設され、その中に、いかにも善人そうな一人の男が収監される。この男との会話は無色透明になる。

やがて住民たちは男のもとを訪れ、あれこれ打ち明け話をする。人々の話は重複することも多く、その都度同じ意見を言うのは非合理なので、やがて男は新聞を作るようになる。

新聞は影響力を持ち、男は権力を握る。そんなある日、突然、すべての人々から色が失われる。

作家からのメッセージ

倉持 裕

まず「滅び」というテーマを頂き、そこから新作戯曲の構想を練り始めた。何かが滅ぶにはその前に栄えている段階があるのが普通だが、最近、特に現在恵まれているわけでもなく、だからこそ未来は現状よりはいくらかましになるだろう、と仄かな期待を抱いている者からまず立ち行かなくなってしまうという、よりいっそう悲惨な滅び方が増えている。そこで一旦はそれを題材に選びかけたのだが、そうした「底辺」だとか「弱者」といったワードが安易に連想される作品は、近年、様々なジャンルで作られて来たので手を引いた。

長年大衆から絶大な支持を得ていたある機能が、社会システムの劇的变化によってあっけなく不要とされてしまう様を描こうと思う。「滅び」というネガティブな響きのテーマながら、風刺性の強い喜劇に仕上げたい。

演出家からのメッセージ

鷗山 仁

「個」か「公」かという葛藤を抱えながら、共同体は生成を繰り返す。滅び、また興り、間断する事がない。

家族であれ、村であれ、国であれ、人間は帰属意識というやつから、どうにも自由になれないものらしい。ならばその帰属先のルールというかモラルというか、そんなものが問題にならざるを得ない訳で、今後、マイケル・サンデルのハーバードの白熱教室的な道德論議が、ますますこの国のブログを賑わすことになるのだろう。

さてこの議論が、果たして十分な情熱と理性と責任感を持って展開されるかどうか。モラルの滅びと再生、新しい価値観の啓示と瞞着。このあたりをせいぜい面白おかしく演出できればと、今のところそんなことを期待、夢想しています。

イロアセル

倉持 裕

Kuramochi Yutaka

1972年生まれ。2000年ペンギンプルベイルパイルズを旗揚げし、作・演出をすべて務め、『ワンマン・ショー』にて第48回岸田國士戯曲賞を受賞。脚本家として『空中ブランコ』『開放弦』『相思双愛』『トリツカレ男』など、劇団外の活動も多数。近年はWOWOW連続即興ドラマ『つかじの無我』『囚われつかじ』など、映像でもヒット作品を出し、連続ドラマ『サラリーマン金太郎』などの脚本も執筆。最近の脚本・演出作品に『窓』『謝罪の罪』『ネジと紙幣』など。演出作品に『現代能楽集V』―『春独丸』『俊寛さん』『愛の鼓動』『サボテニング』『砂利』『センター街』など。新国立劇場では09年にシリーズ・同時代【海外編】『昔の女』の演出を担当。



鵜山 仁

Uyama Hitoshi



慶應義塾大学フランス文学科卒業。舞台芸術学院、文学座附属研究所を経て、1981年、文学座座員に。83年から1年間、文化庁派遣芸術家在外研修員としてパリに滞在。毎日芸術賞千田是也賞、紀伊國屋演劇賞個人賞など、受賞多数。最近の演出作品に『くにご』『炎の人』など。新国立劇場では、『リア王』『新・雨月物語』『新・地獄変』『コペンハーゲン』『花咲く港』『カエル』『アルゴス坂の白い家』『オットーと呼ばれる日本人』『舞台は夢』『現代能楽集 鶴』『ヘンリー六世』、オペラ『ラ・ボエーム』『カルメン』『鹿鳴館』を演出。2009年『ヘンリー六世』の演出で芸術選奨文部科学大臣賞、読売演劇大賞最優秀演出家賞などを受賞。07年9月より10年8月まで新国立劇場演劇芸術監督。

天守物語

中劇場

●前売開始：2011年9月11日（日）

作： 泉 鏡花

演出：白井 晃

企画意図

シリーズ「【美×劇】—滅びゆくものに託した美意識—」の三作目には『天守物語』を取り上げる。1917年に発表された泉鏡花の『天守物語』は圧倒的な言葉の魅力で夢幻の世界を描き、これまでも新派、映画、歌舞伎、オペラなど様々な形で上演されてきた。

播州姫路の白鷺城に棲む美しい妖怪・富姫と、若く凛々しい鷹匠・図書之助との恋物語。大正の新時代を迎えて円熟期に入った鏡花の戯曲の中でも、永井荷風や芥川龍之介ら反自然主義作家の熱烈な支持のもとに、その個性をいかんなく発揮した傑作。

細やかで丁寧な演出力で、数々の難戯曲を具現化してきた白井晃を演出に迎え、2011年秋、中劇場に新たな『天守物語』の世界が誕生する。

作 品

武田播磨守の居城、白鷺城の天守閣。巨大な獅子頭がすえてある最上階には、魔界の者たちが住んでいる。今宵は天守夫人・富姫の親しい友・亀姫がやってくるというので、腰元たちは歓待の準備に大わらわ。

亀姫の一行が到着し、楽しいひと時を過ごす魔物たち。亀姫は手土産の男の生首を披露する。それはこの白鷺城の城主・播磨守の兄弟で、猪苗代亀ヶ城の城主・武田門之介の首だった。亀姫がそろそろ帰ろうとするところへ、城主・播磨守が鷹狩りから戻ってくる。播磨守自慢の白鷹をすっかり気に入った亀姫。富姫は白鷺に化けて羽ばたいてみせ、それに釣られて飛んで来た白鷹を捕らえて亀姫に進呈する。

日はとっぴりと暮れ、富姫が一人獅子頭の前に佇んでいると、灯りを手にもった一人の若者が現れる。その若者は播磨守の鷹匠・姫川図書之助（ずしよのすけ）と名乗り、白鷹を逃がしたために切腹させられるところ、だれも恐れて登ろうとしない天守に白鷹の行方を捜しにいけば一命を助けようといわれたと語る。

富姫は心がまっすぐで凛々しい図書之助を一目で気に入ったが、天守へ登ってくる者は生きて返さない掟なので、二度とここへ来てはいけなさと諭して帰す。しかし雪洞の灯りを大蝙蝠に消されてしまった図書之助が火をわけてほしいと戻ってくる。

もはや図書之助を愛おしく思う富姫は、彼を帰したくないと告げるが、図書之助は迷いつつも地上に戻ることを選ぶ。富姫は自分に会った証拠として、さきほどの播磨守秘蔵の兜を渡す。

しかし図書之助は、兜を盗んだという疑いをかけられ三度、天守にのぼってくる。無実の罪で殺されるくらいなら、天守に登った罪で姫の手にかかって死にたいと。

追手に囲まれる富姫と図書之助。二人は獅子頭の中へと逃げ込むのだが……。

演出家からのメッセージ

白井 晃

今演劇が抱えている課題があって、それは演劇空間の持つ虚構性をどのように捕らえるかの問題だと認識している。日常の現実空間の中に、虚構空間を突如現出させることに演劇の可能性を見て取っていた時代から、劇空間の中に日常のリアリティを食い込ませる空気が演劇の流れとして生まれてきた。劇空間とは何か、虚構とは何かと言う議論なくしてはもはや先に進めなくなってきたようにも思える。

そんな中、泉鏡花の『天守物語』をどのように位置づければ良いかが、演出上の最大の課題となるだろう。幻想文学と言われる鏡花の作品群を、我々の今の視点で捕らえた時、浮き上がってくるものは何か。虚構の中にこそ真実があり、真に純粋な人間性はそこにしかあり得ないと言わんばかりに、巨大な幻想世界を立ち上がらせる泉鏡花の言葉。我々は、今演劇が抱える問題と向き合いながら何を見いだそうとすれば良いか。今回の公演を通して、その答えの一端が見えることを期待している。

天守物語

泉 鏡花

Izumi Kyoka

1873 年生まれ、1939 年没。明治後期から昭和初期にかけて活躍した小説家。戯曲や俳句も手がけた。尾崎紅葉に師事した。『夜行巡査』『外科室』で評価を得、『高野聖』で人気作家の座を不動のものとする。江戸文芸の影響を深くうけた怪奇趣味と特有のロマンティズムで知られ、近代における幻想文学の先駆者としても評価される。他の主要作品に『照葉狂言』『婦系図』『歌行燈』などがある。



白井 晃

Shirai Akira

俳優・演出家。大阪府出身。遊●機械／全自動シアター（1983～2002 年）の活動を経て、現在は硬質なストレートプレイから音楽劇、オペラまで広く活動。美意識の高い、緻密な舞台演出で定評がある。02、03 年と連続して第 9、10 回読売演劇大賞優秀演出家賞受賞。05 年『偶然の音楽』の脚色に対して湯浅芳子賞を受賞。近年の主な演出作品に、世田谷パブリックシアター『偶然の音楽』『三文オペラ』『ガラスの葉』、アトリエ・ダンカン『血の婚礼』、まつもと市民芸術館『ヒステリア』『エドワード・ボンドのリア』、パルコ『中国の不思議な役人』、二期会『オテロ』など。新国立劇場では 05 年シリーズ・笑い④『うら騒ぎ／ノイズ・オフ』、08 年シリーズ・同時代 Vol.2『混じりあうこと、消えること』に続き 3 作目の演出となる。

パーマ屋スマレ

2012.3

新作

小劇場

●前売開始：2011 年 12 月 17 日（土）

作・演出：鄭 義信

出 演：南 果歩／松重 豊 ほか

企画意図

2008 年に、日韓合同公演『焼肉ドラゴン』の作・演出を担当し、その年の話題をさらい、数多くの演劇賞を受賞した鄭義信。

朝鮮戦争が始まった 1950 年代を描いた『たとえば野に咲く花のように』、万博が開催され、高度経済成長に踊る 1970 年前後のある在日コリアン家族を描いた『焼肉ドラゴン』。

前二作のちょうど真ん中、1960 年初頭、九州のある炭鉱町で、在日コリアンの美容師と再婚した日本人炭坑夫を中心に、20 年に渡る炭鉱事故の訴訟について描く、鄭義信渾身の新作書き下ろし演出作品。

作 品

1963 年、冬。九州のある地方。炭住（炭鉱住宅）の一画にある「スマレ美容室」では、明日にひかえた結婚式を祝う歌声が店内に響いている。美容師の高山（高）須美と抗夫の塚本栄市は、つれあいを亡くした同士、同じ哀しみを共有し、再び新しい夫婦となろうとしていた。

そんななか、炭鉱事故を知らせるサイレンが鳴り響く。

栄市も須美の妹である春美の夫も、落盤事故では助かったもののガス患（一酸化炭素中毒患者）になり、発作に苦しみながら、働けずぶらぶらするばかり。そんな患者たちをまわりは白い目で見るばかりだ。

あの人を見捨てるわけにはいかない、3 年たったら労災法で医療費も出なくなってしまう……須美たちは「CO 特別立法」を作ろうと、組合歌を歌いながらビラを配り、必死で訴え始めた。

組合同士の対立、会社にも組合にもたてつき、須美たちは闘争を続けていくが、石炭産業は衰退の一途をたどり、20 年の歳月が流れていく……。

作・演出家からのメッセージ

鄭 義信

『焼肉ドラゴン』の取材の時、伊丹空港のそばに住んでいらした在日韓国人の方からこんな話を聞いた。

「万博のための、伊丹空港の新滑走路建設にですね、九州の炭鉱が閉山になって、あぶれた労働者たちが流れてきたんですわ……そうです、そうです、こっちにおる親戚やら、友人、頼って、韓国人やら……日本人もようけ来ました……とにかく、どっと押し寄せてきて、急に、賑やかになってね……」

僕は何気ないその言葉に衝撃を受けた。九州の炭鉱と、関西の空港が結びつくことなど想像もつかなかった。教科書には載っていない歴史の一端を突きつけられた気がした。

(名もない韓国人、日本人労働者たちが、繁栄の陰に常に、常に、存在してたんや……常に、常に、日本の歴史の底辺を支え続けてきたんや……)

僕は、その時、彼らの息吹をすぐ耳元に聞いたような気がした。

『パーマ屋スマレ』は炭坑の隅にあるちいさな美容院である。そして、そこで暮らすささやかな家族の物語である。しかし、そのささやかな物語の中で、かつて日本経済の大きな柱であった炭坑を描きたいと考えている。

そして、60年代から70年代、高度成長時の日本の姿を、あの高度成長とはなんであったのかを、それが今の僕たちになにをもたらしたのか……それらもろもろを、ちいさな美容院につめこむことができれば……と願っている。

パーマ屋スミレ

鄭 義信

Chong Wishing

1993年に『ザ・寺山』で第38回岸田國士戯曲賞を受賞。その一方、映画に進出して、同年『月はどっちに出ている』の脚本で、毎日映画コンクール脚本賞、キネマ旬報脚本賞などを受賞。98年には、『愛を乞うひと』でキネマ旬報脚本賞、日本アカデミー賞最優秀脚本賞、第一回菊島隆三賞、アジア太平洋映画祭最優秀脚本賞など数々の賞を受賞した。さらに平成13年度芸術祭賞大賞を受賞した『僕はあした十八になる』(2001/NHK)などテレビ・ラジオのシナリオでも活躍する一方、エッセイ集『アンドレアスの帽子』なども出版。

現在も、文学座、こんにゃく座ほかに戯曲を提供する傍ら、自身も作・演出を努めるユニット〈海のサーカス〉に参加している。07年10月には新国立劇場『たとえば野に咲く花のように—アンドロメーダ—』の脚本を手がけた。そして08年の新国立劇場『焼肉ドラゴン』では、第16回読売演劇大賞優秀演出家賞、第12回鶴屋南北戯曲賞、第43回紀伊國屋演劇賞、第59回芸術選奨文部科学大臣賞をそれぞれ受賞している。



まほろば

2012.4

再演

小劇場

●前売開始：2012 年 1 月 22 日（日）

作： 蓬萊竜太

演出：栗山民也

出演：秋山菜津子／中村たつ／魏 涼子／前田亜季／三田和代 ほか

企画意図

2010/2011 シーズンの『鳥瞰図』再演に続き、2008 年 6 月～7 月に小劇場 3 作品連続上演を行った、新国立劇場初登場の若手劇作家とベテラン演出家によるコラボレーション企画「シリーズ・同時代」の中から、その第三弾として上演され、2008 年第 53 回岸田國士戯曲賞を受賞した『まほろば』を再演。

とある田舎町の祭りの夜、本家を名乗る大きな日本家屋の居間を舞台に、命を繋げる、次世代への記憶を紡ぐ、ということテーマに描いた 6 人の女の物語。

東京公演後には全国公演も予定している。

作 品

東京で一人暮らしを続け、未だ独身であるミドリは、久しぶりに実家のある村に休暇をとって帰郷する。それは故郷では有名な祭りの夜。男たちは外に出払い、本家であるミドリの実家は宴会の準備で大忙しである。ミドリの母であるヒロコは小言が絶えない。長女であるミドリは結婚もせずに東京暮らし、次女のキョウコは自由奔放な女で、その娘・ユリアの父親は誰だかわからない、当のユリアもどこにいるのかわからない。本家の血を絶やす気か、と怒り心頭のヒロコを本家の「大母様」であるタマエと、村の娘・マオが二人の間に入り、なだめてくれるのだが、ヒロコの耳には入らない。

しかしそんなヒロコにミドリはきっぱりと言う。

「たとえ婿を連れて帰っても、子供は出来ません。何故なら、私、生理があがってしまったから」

そこに突然、ユリアが帰って来る。不倫の果てにお腹に子どもがいる、この土地で子を産み、この土地で暮らしていきたいと告げる。

「親子揃って、わけのわからない子を産むなんて！」とヒステリックになっているヒロコ。

「父親のいない子供を産む大変さを、あんたは全然わかってない」と出産に反対するキョウコ。

「自分だって父親が誰だかわからずに私を産んだでしょ！」と言い返すユリア。

「産みたいなら産みなさい！産める時に産まないときっと後悔するわよ！」と力説するミドリ。

それぞれの思いがすれ違い、どこにも辿りつかない。二日酔いで気持ちが悪くなりトイレに駆け込むミドリ。ふいに「それはもしかしてつわりではないの？」と指摘をされる。そういえば大いに酔っ払った日、男と関係を持ったような記憶があるような、ないような。妊娠検査の薬を持ってくるヒロコ。調べるミドリ。陽性であるか陰性であるかを待つ緊張の時間。しかし、この待っている時間にヒロコにあることを問われる。

「もし、妊娠していたら。本当に産むの？ 本当に母親になる覚悟はあるの？」

はたと、このシンプルな質問に立ち返るミドリ。

「私の幸せとは何か？ 母親になることなのか？」

そして、ついに検査の結果が出る瞬間が訪れる……。

作家からのメッセージ

蓬萊竜太

初めて女性だけしか出ない物語を書いた。色んな出会いをさせてもらった。運良く賞を頂いた。僕の中では思い出深い作品になった。雪の中、新国立劇場の地下に缶詰めになり「閉経」の事を考えていた。頭の中では女達が男に聞かせられない会話をしながら激しく闘っていた。僕は少しだけにやけながらその会話を記録していく。そんな風にした作品だった。

あのエネルギーで言いたい放題な女達に再び会えることが嬉しい。

演出家からのメッセージ

栗山民也

この作品と一緒に仕事をするまでは、蓬萊竜太について、詳しくはなにも知らなかった。演劇制作から、既に上演された彼の二本の戯曲を渡された。それを読んでから、蓬萊竜太に会うことにした。その二本の戯曲の印象からは、骨太で、すこし理屈っぽい演劇青年を勝手に想像していたが、まったく違って、茶目っ気があって、やさしくナイーブで、酒がめっぽう好きな若い戯曲作家だった。

そのときの最初の打ち合わせで、登場人物は女だけでということになった。ならば「人間の生命」を劇の主題に見据えよう、などとかなり気合いの入った会話はトントンと弾んだ。そして、時をおかず短めながら簡潔なプロットが送られ、タイトルが決定し、台詞が次々と生まれていった。正直、その物語の展開の面白さと腰の据わった台詞術には舌を巻く思いだった。キャスティングも、私の好きな女優さんたちが集まってくれて、まるで宴にも似た賑やかで豊かな稽古が続いた。

そして初演の幕は、無事開いた。それから、蓬萊竜太はこの戯曲で岸田戯曲賞を受賞した。また、あの人たちと一緒に、「人間の生命」について、楽しく語らうことが出来ると思うと、心が弾む。

まほろば

蓬萊竜太

Hourai Ryuta

演出家・劇作家。1999年に舞台芸術学院の同期生・西條義将が主宰するモダンスイマーズの旗揚げに参加。以降、すべての作品の作・演出を務める。

劇団外にも、チーム申『時には父のない子のように』、三田村組『イヌよさらば』『仰げば尊くなし』『天井』『男の一生』の作・演出、CX『第32進海丸』、TBS『世界の中心で、愛をさけぶ』、CUBE『東京タワー 〜オカンとボクと、時々、オトン〜』、松竹『赤い城黒い砂』の脚本、映画『ピアノの森』の脚本およびノベライズ、『ガチボーイ』原作、テレビドラマ『ザ・クイズショウ』（第6話・第7話）脚本など、多岐にわたり活躍中。

人間の心の機微を若い感性でのびやかに描き、世代を超えて多くの人々の共感を集め、本格派ストーリーテラーとして注目を浴びている。

新国立劇場では2008年『まほろば』（第53回岸田國士戯曲賞受賞）、10年『エネミ』を執筆している。



栗山民也

Kuriyama Tamiya

早稲田大学文学部演劇科卒業。主な演出作品に、『ゴドーを待ちながら』『阿国』『獅子を飼う』『GHETTO / ゲットー』『海の沸点』『エヴァ、帰りのない旅』『太鼓たたいて笛ふいて』『マリー・アントワネット』『ロマンス』『かもめ』『きらめく星座』『BLACK BIRD』『炎の人』『組曲虐殺』『海をゆく者』『ロックンロール』『イリアス』『カエサル』『水の手紙』『少年口伝隊一九四五』などがある。紀伊國屋演劇賞、読売演劇大賞最優秀演出家賞、芸術選奨文部大臣新人賞、毎日芸術賞第1回千田是也賞、第1回朝日舞台芸術賞などを受賞。新国立劇場では『今宵限りは……』『ブッダ』『キーン』『夜への長い旅路』『欲望という名の電車』『ピカドン・キジムナー』『夢の裂け目』『ワーニャおじさん』『櫻の園』『浮標』『夢の泪』『涙の谷、銀河の丘』『世阿彌』『胎内』『喪服の似合うエレクトラ』『箱根強羅ホテル』『母・胆っ玉とその子供たち』『夢の痂』『CLEANSKINS / きれいな肌』『氷屋来たる』『まほろば』『東京裁判三部作（再演）』、オペラ『夕鶴』『蝶々夫人』を演出。元新国立劇場演劇芸術監督、現在、新国立劇場演劇研修所所長。2010/2011シーズンは『雨』を演出する。

海外作品 (日本初演) 予定

2012.4 ~ 5

日本初演

小劇場

●前売開始：2012 年 2 月 18 日 (土)

演出：宮田慶子

企画意図

日本で未上演の海外最新戯曲を紹介。

海外で評価を受けた最新作を選びすぐって紹介する。

作 品

※現在選考中

サロメ

新訳上演

中劇場

●前売開始：2012年3月17日（土）

作： オスカー・ワイルド

翻訳：平野啓一郎

演出：宮本亜門

企画意図

2011年1月に開場したKAAT 神奈川芸術劇場の芸術監督、宮本亜門が、新国立劇場ではじめてストレート・プレイの演出を手がける。

『サロメ』は1891年に書かれたが、1893年2月にパリでフランス語版が発行され、その一年後に英訳がロンドンで出版された。その後現在まで数多くの外国語に翻訳されている。1896年ループル座でフランス初演。日本初演は1914年、松井須磨子主演で芸術座（劇団）による公演。最近では2009年の翻案劇としての上演や、ク・ナウカによる上演がある。

1905年にはリヒャルト・シュトラウスがドイツ語訳を歌劇にし、今日まで非常に人気の高いオペラ演目となり、近年も世界的に話題となる公演が次々と行われている。

本公演ではイェルサレムの王女サロメとヨカナーンの恋の悲劇にいたるまでの群衆劇を丁寧に作り、義理の父であるヘロデ王、母のヘロディアスとの3人の家族を中心に幻想的な台詞劇、美しく魅力的な新しい作品として甦らせる。

2010/2011シーズンに続く [JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—] の一環として小説家の平野啓一郎によるフランス語からの新訳上演を企画し、現代の日本語の台詞によって作品世界を再生し、上演したい。（2011年10月には新国立劇場オペラ『サロメ』が予定されている。）

作 品

舞台はイェルサレム、ヘロデ王の宮殿。サロメは王妃ヘロディアスの娘で、ユダヤ王ヘロデは義父。ヘロデはサロメの実の父である兄を殺し、ヘロディアスを妻としていた。

宴の席で、ヘロデ王に見つめられていたサロメがテラスに逃げていくと、その地下の井戸から不気味な声が聞こえてきた。ヘロデ王に幽閉されていた預言者ヨカナーンの声。サロメは興味を持ち、親衛隊長に命じて、ヨカナーンを井戸から外に出してもらう。

ヨカナーンはヘロディアスの近親婚の罪をとがめるが、サロメの誘いには目もくれず、また、井戸へ戻っていく。サロメを追って、ヘロデ王、続いてヘロディアスがテラスに出てくると、地下からはヨカナーンの声が聞こえる。踊って見せよと命ずるヘロデ王。サロメはその代わりにヨカナーンの首を要求する。

翻訳家からのメッセージ

平野啓一郎

『サロメ』の新訳に当たって

『サロメ』の旧訳としては、荘重で、エキゾチックな文体が熱烈な愛好家を生んだ日夏耿之介訳がすぐに思い出される。私も幻惑された一人だが、究極の「読むテキスト」であるだけに、舞台上で上演するとなると難しい。タイトな福田恆存訳も優れているが、口語的である分、古代的というより、二世代くらい前の日本語という感じがする。いずれ古色を帯びた物語には違いないが、その古さの演出には、現代の官能が染み渡っていなければならない。それこそが、ワイルドの創意だった。

新訳に当たっては、役者が動けるということを第一に考えて、肉体に開かれた台詞を心掛けた。無論、現代の観客が、体の芯から感じ取れるような言葉でなければならない。

登場人物たちのほんの些細な一言、些細な身ぶりに至るまで、サロメの存在が息苦しいほどに浸透し、やがてその美が、空間のすべてを支配する瞬間をありありと開顕できたならば、翻訳は成功したと言えるだろう。

演出家からのメッセージ

宮本亜門

大正2年、近代劇の女優第一号といわれる松井須磨子は『サロメ』を演じ、当たり役としました。それ以来、オスカー・ワイルド作の戯曲『サロメ』は日本の現状変化と共に、数々の役者、翻訳、演出によって受け継がれてきました。三島由紀夫においては、初めて買った本であると共に、自らの追悼公演にもなった作品ともいわれています。

ワイルドの『サロメ』は何故こうも我々の心を揺さぶってきたのでしょうか。ヨカナーンの血がサロメを興奮させたように、この戯曲が現代に生々しく脈打っている意味を探りながら、演出をしていきたいと思います。

サロメ

オスカー・ワイルド

Oscar Wild

詩人・小説家・劇作家。1854 年アイルランドのダブリン生まれ。ダブリン大学のトリニティ・カレッジを卒業後、オックスフォード大学に学ぶ。「芸術のための芸術」を主張して唯美主義、芸術至上主義に基づく運動を展開し、その多彩な文筆活動によって、耽美的・退廃的・懐疑的な 19 世紀末の芸術の旗手とされた。その作品と生きざまは世界中に影響をおよぼし、日本においても森鷗外、夏目漱石、芥川龍之介以降多数の文学者たちが意識することとなる。小説『ドリアン・グレイの肖像』や『ウィンダム嬢夫人の扇』などの喜劇作品、短編集『幸福の王子・その他』『柘榴の家』などがある。晩年は男色のため収監され、出獄後、失意のままに 1900 年没。



©photo by ハニー

平野啓一郎

Hirano Keiichiro

1975 年愛知県生まれ。京都大学法学部卒。99 年在学中に文芸誌「新潮」に投稿した『日蝕』により第 120 回芥川賞を受賞。以後、2002 年発表の大長編『葬送』をはじめ、数々の作品を発表し、各国で翻訳紹介されている。主な著書に『一月物語』『高瀬川』『滴り落ちる時計たちの波紋』『顔のない裸体たち』『あなたが、いなかった、あなた』『決壊』『モノローグ (エッセイ集)』『ディアローグ (対談集)』『小説の読み方 感想が語れる着眼点』『ドーン』など。近著は『かたちだけの愛』(中央公論新社)。ほかの受賞歴に平成 12 年度第 18 回京都府文化賞奨励賞、『決壊』にて 08 年第 59 回芸術選奨文部科学大臣新人賞、『ドーン』にて 09 年第 19 回ドゥマゴ文学賞など。戯曲の翻訳は今回初めてとなる。

宮本亜門

Miyamoto Amon

出演者、振付師を経て、2 年間ロンドン、ニューヨークに留学。帰国後の 1987 年にオリジナル・ミュージカル『アイ・ガット・マーマン』で演出家としてデビュー。翌 88 年には同作品で昭和 63 年度文化庁芸術祭賞を受賞。ミュージカルのみならず、ストレート・プレイ、オペラなど、常に注目される演出家として、国内外へ活動の場を広げている。2004 年に、ニューヨークのブロードウェイにて『太平洋序曲』を東洋人初の演出家として手がけ、05 年同作はトニー賞の 4 部門でノミネートされる。また、10 年には、米・フィラデルフィアオペラで、作曲家であり指揮者のタン・ドゥンを迎えた現代オペラ『TEA: A Mirror of Soul』を再演し、ロンドン、ウエストエンドにて『ファンタスティックス』を演出した。新国立劇場では『太平洋序曲』『INTO THE WOODS』を手がけている。『INTO THE WOODS』の演出で第 4 回朝日舞台芸術賞秋元松代賞受賞。

11 年 1 月オープン of KAAT 神奈川芸術劇場の初代芸術監督に就任。柿落とし公演『金閣寺』を演出。



©photo by Tsukada Kazunori

温室

小劇場

●前売開始：2012 年 4 月 21 日（土）

作： ハロルド・ピンター

演出：深津篤史

企画意図

宮田監督の 2 シーズン目の最後の作品は、イギリスの作家でノーベル文学賞も受賞した、ハロルド・ピンターの登場。ピンターは現代イギリスを代表するだけでなく、20 世紀以降の演劇の潮流の中でも際立って大きな影響力を全世界の演劇界に与えており、まさに 20 世紀を代表する劇作家である。

個人のアイデンティティの危うさや、社会の欺瞞、或いは人間関係の不安定さを、鋭く切り詰められた言葉で、時に過激に表現し、登場人物のキャラクターも崩壊寸前まで突き詰めた作品群は 21 世紀になった今でも現代人の心に深く突き刺さる。

演出には『動員挿話』『象』で鮮烈な印象を残した深津篤史があたり、刺激的な舞台が期待される。

作 品

病院とおもわれる国営収容施設。クリスマス。

患者 6457 号が死に 6459 号が出産したという、部下ギブスからの報告に、驚き怒る施設の最高責任者のルートは、秩序が何よりも重要だと主張し、妊娠させた犯人を探し出せと命令する。

そして、ギブスは犯人が見つかったと報告するが、事態は奇妙な方向へと動き出していく……。

演出家からのメッセージ

深津篤史

劇作家でもある私が、初めて自作以外の作品を演出したのはもう15年も前の事、サム・シェパードの『フル・フォア・ラブ』だった。その後本当に色んな作品を、特に新国立劇場さんでは、やらせて頂いたが、何故かあれ以来英語圏の作品に縁がなく、ここに至った次第だ。

15年前も何故私がこの作品をとって、台詞長すぎないか、苦手だこれとか、メイとか名前が恥ずかしいとか、思ったけれど、15年経ってそういう事はもう思わないというか、ちょっぴり麻痺したけど、この度はこれまた大変な作品であるなあ。困ったなあというのが第一印象だ。何がって、登場人物に可愛げがない。お馬鹿さん一人は除いても。で、感情移入されにくい。いや、たぶん、されない。そういう意図の作品なのだから仕方がないが、これを管理社会の無表情な演劇ってやったら何の焼き直しだって事になるので、私はやっぱり、いかなる状況下にあっても温度のある人間を描きたいと思います。悲劇的でなく、悲観的な喜劇になればと思います。

温室

ハロルド・ピンター

Harold Pinter

1930 年、ロンドン生まれ。

俳優としてキャリアをスタートし、57 年、処女戯曲『部屋』で劇作家に転身、同年に『誕生日パーティ』『料理昇降機』を発表後、『管理人』（1959 年）で注目を集め、その後、『帰郷』（1964 年）などの作品で地位を確立。追いつめられた人をめぐる不条理を、恐怖とユーモアのうちに描く独特の作風は、その他を冠してピンタレスクと呼ばれる。初期の心理的リアリズムを指向する作風から、『風景』（1967 年）などの詩的な作品を経て、とりわけ『景気づけに一杯』（1984 年）以降は政治色の強い作品を次々と発表。ラジオ・テレビドラマ、映画の世界でも活躍し、『フランス軍中尉の女』（1981 年）『スルース』（2007 年）などの映画脚本で知られる。人権活動家としても著名で、イラク戦争開戦時にも積極的な反戦活動を展開した。他の代表戯曲に『誰もいない国』（1974 年）『灰から灰へ』（1996 年）などがある。2005 年ノーベル文学賞受賞。08 年 12 月 24 日、78 歳で逝去。



深津篤史

Fukatsu Shigefumi

関西で活躍する劇団桃園会主宰。劇作家・演出家・劇団プロデューサー。NPO大阪現代舞台芸術協会理事長。1967 年生まれ。同志社大学大学院文学研究科修士課程修了。主な作品に『うちやまつり』（第 42 回岸田國士戯曲賞受賞）、『のたり、のたり』『よぶには、とおい』『熱帯夜』『paradise lost, lost』など。飛田演劇賞快挙賞、兵庫県芸術奨励賞、大阪咲くやこの花賞などのほか、新国立劇場『動員挿話』で第 13 回読売演劇大賞優秀演出家賞、作品賞を受賞。ほかに『近代能楽集 弱法師』『象』も演出。

PLAY

公演一覧

開場記念公演～2010/2011シーズン

シーズン	演目	作	訳・脚色	演出	公演初日
開場記念公演	紙屋町さくらホテル	井上ひさし		渡辺浩子	97.10/22
	[蒲田行進曲完結編] 銀ちゃんが逝く	つかこうへい		つかこうへい	97.11/13
	夜明け前	原作 島崎藤村	脚色 村山知義 補訂脚本 津上 忠	木村光一	97.12/4
	リア王	ウィリアム・シェイクスピア	松岡和子	鶴山 仁	98.1/17
1998/ 1999	虹を渡る女	岩松 了		岩松 了	98.5/7
	幽霊はここにいる	安部公房		串田和美	98.5/12
	今宵かざりは… 1928 超巴里井主義宣言の夜	竹内統一郎		栗山民也	98.6/12
	音楽劇 ブッダ	原作 手塚治虫	脚本 佐藤 信	栗山民也	98.9/7
	THE PIT フェスティバル				
	カストリ・エレジー スタインベック 「二十日鼠と人間」より	脚本 鐘下辰男		鐘下辰男	98.10/3
	神々の国の首都	坂手洋二		坂手洋二	98.10/17
	寿歌	北村 想		北村 想	98.10/29
	ディア・ライアー すてきな嘘つき	ジェローム・キルティ	丹野郁弓	宮田慶子	98.11/4
	野望と夏草	山崎正和		西川信廣	98.12/2
	新・雨月物語	脚本 鐘下辰男		鶴山 仁	99.1/11
	子午線の祀り	木下順二	演出 観世栄夫／内山 鶴 酒井 誠／高瀬精一郎		99.2/3
	セツァンの善人	ヘルトルト・ブレヒト	松岡和子	串田和美	99.5/18
	羅生門	原作 芥川龍之介		構成・演出 渡辺和子	99.6/4
	棋人 ―チャーレン―	過士行	菱沼彬晃	林兆華	99.7/1
1999/ 2000	キーン 或いは狂気と天才	J.P.サルトル 上演台本 栗山民也／江守 徹	鈴木力衛	栗山民也	99.10/4
	美しきものの伝説	宮本 研		木村光一	99.11/4
	―森本薫の世界―				
	かくて新年は	森本 薫		宮田慶子	99.12/8
	怒濤	森本 薫		マキノノゾミ	00.1/11
	華々しき一族	森本 薫		鐘下辰男	00.2/9
	新・地獄変	原作 芥川龍之介	脚本 鐘下辰男	鶴山 仁	00.3/23
	なよたけ	加藤道夫		木村光一	00.4/11
	夜への長い旅路	ユージン・オニール	沼澤治治	栗山民也	00.5/11
2000/ 2001	マクベス	ウィリアム・シェイクスピア	福田恒存翻訳より 潤色 鐘下辰男	鐘下辰男	00.9/8
	ブロードウェイ・ミュージカル 太平洋序曲	作曲・作詞 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジョン・ワイドマン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	00.10/2
	欲望という名の電車	テネシー・ウィリアムズ	鳴海四郎	栗山民也	00.10/20
	シリーズ 「時代と記憶」				
	memorandum メモランダム	構想・構成 ダムタイプ			00.11/27
	母たちの国へ	松田正隆		西川信廣	01.1/10
	ピカドン・キジムナー	坂手洋二		栗山民也	01.2/10
	こんにちば、母さん	永井 愛		永井 愛	01.3/12
	夢の裂け目	井上ひさし		栗山民也	01.5/8
	紙屋町さくらホテル	井上ひさし		渡辺浩子／井上ひさし	01.4/4
	廣作・桜の森の満開の下	野田秀樹		野田秀樹	01.6/1

シーズン	演目	作	訳・脚色	演出	公演初日
2001/ 2002	海外招待作品 Vol.1 太陽劇団 堤防の上の鼓手	エレヌ・シクスー	字幕翻訳 松本伊瑳子	アリアヌ・ムヌーシュキン	01.9/7
	コペンハーゲン	マイケル・フレイン	平川大作	鶴山 仁	01.10/29
	美女で野獣	荻野アンナ		宮田慶子	01.12/10
	シリーズ チェーホフ・魂の仕事				
	Vol.1 かもめ	アントン・チェーホフ	英訳 マイケル・フレイン 翻訳 小田島雄志	マキノノゾミ	02.1/11
	Vol.2 くしゃみ /the Sneeze	アントン・チェーホフ	台本 マイケル・フレイン 翻訳 小田島恒志	熊倉一雄	02.2/28
	Vol.3 「三人姉妹」を追放されし トウゼンバフの物語	岩松 了		岩松 了	02.4/1
	Vol.4 ワーニャおじさん 四幕の田園生活劇	アントン・チェーホフ	小野理子	栗山民也	02.5/9
	Vol.5 櫻の園	アントン・チェーホフ	潤色 堀越 真 (神西清翻訳による)	栗山民也	02.6/21
2002/ 2003	その河をこえて、五月	平田オリザ／金明和		李炳熹／平田オリザ	02.6/3
	海外招待作品 Vol.2 国際チェーホフ演劇祭 in モスクワ ハムレット	ウィリアム・シェイクスピア		ペーター・シュタイン	02.9/7
	ブロードウェイ・ミュージカル 太平洋序曲	作曲・作詞 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジョン・ワイドマン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	02.10/11
	メヤジルシ ―誘われて	太田省吾		太田省吾	02.11/12
	シリーズ 「現在へ、日本の劇」				
	①ピルグリム	鴻上尚史		鴻上尚史	03.1/14
	②浮標	三好十郎		栗山民也	03.2/19
	③マッチ売りの少女	別役 実		坂手洋二	03.4/8
	④サド侯爵夫人	三島由紀夫		鐘下辰男	03.5/26
2003/ 2004	涙の谷、銀河の丘	松田正隆		栗山民也	03.5/13
	ゴロヴリョフ家の人々	原作 サルティコフ・シチェドリン	翻訳 湯淺芳子 脚本 永井 愛	永井 愛	03.6/18
	nocturne ―月下の歩行者	構成 松本雄吉		松本雄吉	03.9/8
	夢の泪	井上ひさし		栗山民也	03.10/9
	世阿彌	山崎正和		栗山民也	03.11/27
	シリーズ 「女と男の風景」				
	①海外招待作品 Vol.3 香港・劇場組合 The Game /ザ・ゲーム	ウジェーヌ・イヨネスコの悲喜劇「椅子」より 翻案 ジム・チム／オリヴィア・ヤン	字幕 角田美知代	ジム・チム／オリヴィア・ヤン	04.2/20
	② THE OTHER SIDE ／線のむこう側	アリエル・ドーフマン	水谷八也	孫振策	04.4/12
	③てのひらのこびと	鈴江俊郎		松本祐子	04.5/11
	④請願 静かな叫び	ブライアン・クラーク	吉原豊司	木村光一	04.6/22
	こんにちは、母さん	永井 愛		永井 愛	04.3/10
	透明人間の蒸気	野田秀樹		野田秀樹	04.3/17
	ブロードウェイ・ミュージカル INTO THE WOODS	作曲・作詞 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジェイムズ・ラパイン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	04.6/9

シーズン	演目	作	訳・脚色	演出	公演初日
2004/ 2005	* 胎内	三好十郎		栗山民也	04.10/4
	* ヒトノカケラ	篠原久美子		宮崎真子	04.10/22
	* 二人の女兵士の物語	坂手洋二		坂手洋二	04.11/8
	喪服の似合うエレクトラ	ユージン・オニール	沼澤洽治	栗山民也	04.11/16
	城	原作 フランツ・カフカ	構成 松本 修	松本 修	05.1/14
	シリーズ 笑い				
	①花咲く港	菊田一夫		鶴山 仁	05.3/14
	②コミュニケーションズ 現代劇作家によるコント集	作 綾田俊樹／いとうせいこう／ケラリーノ・サンドロヴィッチ／杉浦久幸 高橋徹郎／竹内 佑／鄭 義信／土田英生／別役 実／ふじきみつ彦／武藤真弓 原作使用 筒井康隆	構成・演出 渡辺えり子		05.4/8
	③箱根強羅ホテル	井上ひさし		栗山民也	05.5/19
	④うら騒ぎ ノイズ・オフ	マイケル・フレイン	小田島恒志	白井 晃	05.6/27
	その河をこえて、五月	平田オリザ／金明和		李炳熹／平田オリザ	05.5/13
2005/ 2006	海外招待作品 Vol.4 ベルリナー・アンサンブル アルトウロ・ウイの興隆	ベルトルト・ブレヒト	イヤホンガイド翻訳 新野守広	ハイナー・ミュラー	05.6/22
	* 黒いチューリップ／盲導犬	唐 十郎		中野敦之	05.9/27
	* 屋上庭園／動員挿話	岸田國士		宮田慶子〈屋上庭園〉 深津篤史〈動員挿話〉	05.10/31
	母・肝っ玉とその子供たち —三十年代戦争年代記	ベルトルト・ブレヒト	谷川道子	栗山民也	05.11/28
	ガラスの動物園	テネシー・ウィリアムズ	小田島雄志	イリーナ・ブルック	06.2/9
	十二夜	ウィリアム・シェイクスピア	脚本 山崎清介 小田島雄志翻訳による	山崎清介	06.3/7
	シリーズ 「われわれはどこへいくのか」				
	①カエル	過士行	菱沼彬晃	鶴山 仁	06.4/1
	* ②マテリアル・ママ	岩松 了		岩松 了	06.4/19
	③やわらかい服を着て	永井 愛		永井 愛	06.5/22
	④夢の痼	井上ひさし		栗山民也	06.6/28
	ブロードウェイ・ミュージカル Into the Woods	作曲・作詞 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジェイムズ・ラパイン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	06.5/19
	アジアの女	長塚圭史		長塚圭史	06.9/28
	「劇的な情念をめぐって」—世界の名作より—				
2006/ 2007	シラノ・ド・ベルジュラック	原作 エドモン・ロスタン	翻訳 辰野 隆／ 鈴木信太郎	構成・演出 鈴木忠志	06.11/2
	イワーノフ／ オイディプス王	原作 アントン・チェーホフ 原作 ソフォクレス	翻訳 池田健太郎 日本語 福田恒存 ドイツ語 ヘルダーリン	構成・演出 鈴木忠志	06.11/4
	* エンジョイ	岡田利規		岡田利規	06.12/7
	コペンハーゲン	マイケル・フレイン	平川大作	鶴山 仁	07.3/1
	CLEANSKINS／きれいな肌	シャン・カーン	小田島恒志	栗山民也	07.4/18
	下周村 —花に嵐のたえもあるさ—	平田オリザ／李六乙		李六乙／平田オリザ	07.5/15
	夏の夜の夢	ウィリアム・シェイクスピア	松岡和子	ジョン・ケアード	07.5/31
	氷屋来たる	ユージン・オニール	沼澤洽治	栗山民也	07.6/18

* =THE LOFT 公演

シーズン	演目	作	訳・脚色	演出	公演初日
2007/ 2008	「三つの悲劇」 ―ギリシャから				
	Vol.1 アルゴス坂の白い家 ―クリュタイムストラ―	川村 毅		鶴山 仁	07.9/20
	Vol.2 たとえば野に咲く花のように ―アンドロマケ―	鄭義信		鈴木裕美	07.10/17
	Vol.3 異人の唄 ―アンティゴネ―	土田世紀	脚色 鐘下辰男	鐘下辰男	07.11/14
	屋上庭園／動員挿話	岸田國士		宮田慶子 〈屋上庭園〉 深津篤史 〈動員挿話〉	08.2/26
	焼肉ドラゴン	鄭義信		梁 正雄／鄭義信	08.4/17
	オットーと呼ばれる日本人	木下順二		鶴山 仁	08.5/27
	シリーズ・同時代				
	Vol.1 鳥瞰図 ―ちょうかんず―	早船 聡		松本祐子	08.6/11
	Vol.2 混じりあうこと、消えること	前田司郎		白井 晃	08.6/27
	Vol.3 まほろば	蓬萊竜太		栗山民也	08.7/14
2008/ 2009	近代能楽集『綾の鼓』『弱法師』	三島由紀夫		前田司郎〈綾の鼓〉 深津篤史〈弱法師〉	08.9/25
	山の巨人たち	ルイジ・ピランデルロ	翻訳 田之倉稔	ジョルジュ・ラヴォーダン	08.10/23
	舞台は夢 ―イリュージョン・コミック―	ビエール・コルネイユ	翻訳 伊藤 洋	鶴山 仁	08.12/3
	シリーズ・同時代【海外編】				
	Vol.1 昔の女	ローラント・シンメルプフェニヒ	翻訳 大塚 直	倉持 裕	09.3/12
	Vol.2 シュート・ザ・クロウ	オーウェン・マカファーティ	翻訳 浦辺千鶴／小田島恒志	田村孝裕	09.4/10
	Vol.3 タトゥー	デアア・ローアー	翻訳 三輪玲子	岡田利規	09.5/15
	夏の夜の夢	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 松岡和子	ジョン・ケアード	09.5/29
	現代能楽集 鶴	坂手洋二		鶴山 仁	09.7/2
	ヘンリー六世	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 小田島雄志	鶴山 仁	
2009/ 2010	第一部 百年戦争				09.10/27
	第二部 敗北と混乱				09.10/28
	第三部 薔薇戦争				09.10/29
	象	別役 実		深津篤史	10.3/5
	東京裁判三部作	井上ひさし		栗山民也	
	夢の裂け目				10.4/4
	夢の泪				10.5/6
	夢の痂 かさよけ				10.6/3
	エネミイ	蓬萊竜太		鈴木裕美	10.7/1
2010/ 2011	「JAPAN MEETS... ―現代劇の系譜をひもとく―」				
	I ヘッダ・ガーブレル	ヘンリック・イブセン	翻訳 アンネ・ランデ・ペータス 長島 確	宮田慶子	10.9/17
	II やけたトタン屋根の上の猫	テネシー・ウィリアムズ	翻訳 常田景子	松本祐子	10.11/9
	III わが町	ゾートン・ワイルダー	翻訳 水谷八也	宮田慶子	11.1/13
	IV ゴドーを待ちながら	サミュエル・ベケット	翻訳 岩切正一郎	森新太郎	11.4/15
	焼肉ドラゴン	鄭 義信	翻訳 川原賢柱	鄭義信	11.2/7
	鳥瞰図 ―ちょうかんず―	早船 聡		松本祐子	11.5/10
	雨	井上ひさし		栗山民也	11.6/9
	おどくみ	青木 豪		宮田慶子	11.6/27